

モンスター娘に襲われる A S M R ~アルラウネのラウニカ編~

(Attacked by a Monster Girl ASMR -Alraune Girl Launica Version -)

あらすじ

冒険者が訪れる大樹海。そこは樹海というだけあり、多くの植物が存在する。中には植物の形をした魔物も……。特にアルラウネは普段、周囲の森に溶け込んでいるが、男性が近づくと体液を求めて活動を始める魔物である。アルラウネの個体ラウニカは、日照不足の場所で育ったために、陰気な性格。しかし日光を補うために、通りがかった冒険者から栄養分として精液を奪取する方向に進化していた。養分を得たラウニカは、さらに淫乱な本性をあらわにして、最終的には冒険者自身を『養分』とするのだった。

登場キャラ

アルラウネのラウニカ：樹海に生息するアルラウネ。光合成と地面からの養分で生きていいくアルラウネだが、日光が得られず暗くて陰気な性格になってしまった。養分を補うために、人間から精液を搾り取ったり、直接栄養分とする方向に進化していった。花粉や香りで獲物となる人間を操る術を持つ。日光のある場所で美しい花を咲かせる他のアルラウネにコンプレックスを持っているので、卑屈な性格ではあるが、褒められると弱いチョロいところも。ただし人間のことは養分を出してくれる存在としか思っていない。

少年冒険者：貴重な薬を作るために樹海を訪れた薬学士の少年。薬の材料となる植物を探しにきたところ、ラウニカに目をつけられ、ラウニカの花と引き換えに精液の提供を半ば強制的に要求される。その結果、ラウニカの花粉を浴びて、精液を絞りつくされてしまう。

(※制作都合上、一部内容を変更した箇所があります)

1. 出会い～日陰の植物娘～

ラウニカ 「あ、あのう……」

ラウニカ 「えと……ちょっと、いいですか？」

ラウニカ 「ううう……聞こえてないのかな。もしかして、私、無視されてる？」

ラウニカ 「あ、あ、行っちゃう……もっとおっきな声出さなきゃ」

ラウニカ 「すうううううう」

ラウニカ 「あのっ！」

ラウニカ 「あ、そうです。こっちです、こっち……へ、へ、どうも。んふ」

ラウニカ 「あ、私、アルラウネのラウニカっていいます」

ラウニカ 「えっとお……あの、急にすみません」

ラウニカ 「な、なんか最近この辺り、暗くないですか？ ねえ？」

ラウニカ 「え？ あっ、そそそそうですよね。初めて来たんですもんね。知らないですよね
……あはは」

ラウニカ 「いやあ……え？ そう！ そうなんですよ。おっしゃる通り！ 周りの葉っぱが
すごくて。日光がさえぎられちゃって……」

ラウニカ 「あ、で、でもっ。そこに気づくなんてさすが人間さんですね！ もしかして植物
に詳しいんですか？ んふふふ」

ラウニカ 「おかげで私、太陽の光を浴びられなくて……そこで、あの……もしよかったです
……なんですけどお」

ラウニカ 「周りの葉っぱを切り落としたりして、日当たりをよくしてもらえませんか？」

ラウニカ 「あ、もちろん、ただでとは言いませんよ？ 私の葉っぱやお花、いいお薬の材料
になると思いますよお」

ラウニカ 「人間さんの世界では手に入らないような、それはそれは強力な……ふひ、ふひひ
ひ……」

ラウニカ 「え、い、いいんですか？ やったあ……じゃあ、早速お願ひしますっ」

ラウニカ 「お、おお～～。ふおおおおお～！ やったあ」

ラウニカ 「ああ……空が見える……太陽が見えるう……んふう」

ラウニカ 「ふひひ、私なんかのためにい……ありがとうございますう……へ、へ、へ」

ラウニカ 「あ、待って！ 行かないで！」

ラウニカ「すすすすすいませんっ！ 止めようとして、慌ててツルで拘束してしまいました」
ラウニカ「でもでも、あのっ……もうひとつ、追加のお願いが……」
ラウニカ「その……えっと、ですね。お願いというのは、その……」
ラウニカ「ん、んふ……なんて言つたらいいか、ううん……え、へ、うえへ」
ラウニカ「その、ですね？ 日光で栄養を生成するまで時間がかかるてしまうので……その……」

ラウニカ「え、ええっと……あなたも養分にしたいなって……えへっ」

ラウニカ「あ、大丈夫です大丈夫です。暴れないで！ 殺しません！ 殺しませんから」
ラウニカ「ちょおっと……その……えっと……あなたの……んふ、んふ、うえへ」

ラウニカ「あなたの精液をいただくだけなので」

ラウニカ「へ……へ……うえへ……ふひっ、ふひひっ」
ラウニカ「そんなに踏ん張って抵抗しないでくださいよお」
ラウニカ「しょ～がない。引きずってでも、こっちに来てもらいますからね」
ラウニカ「さあ……こちらへどうぞ、人間さん」

ラウニカ「よいしょ……よいしょ……」

2. ツル拘束耳舐め～耳の中を媚薬の蜜と花粉でいっぱいに～

ラウニカ「さあ……もっと私の近くへ……へ、へ、ふへ」

ラウニカ「ああっ、ダメですぅ。暴れないでください。もっとキツくツルで拘束しますよっ？」

ラウニカ「んふ、んふ……このまま絞め殺しちゃわないよう気を付けないと……いひひ」

ラウニカ「……あ、おとなしくしてくれますか？ ならよかったですぅ。いい子いい子……えへ。じゃ、準備しますぅ」

ラウニカ「じゅるり」

ラウニカ「す、すみませんねえ、日光が十分なら、こんなことする必要も無いんですが」

ラウニカ「ここは日当たりが悪くて……私は人間さんから栄養をいただかないと、生きていけないんですぅ」

ラウニカ「まあ……そのお……私なんかが相手ではイヤかもですが……それなりに気持ちよくしてあげますので……うえひひひ」

ラウニカ「私、全身から蜜や花粉を出せるんですけどお……」

ラウニカ「この蜜や花粉には、とっても強力な媚薬効果があるのでえ……ふひひっ」

ラウニカ「おちんぽおっさくさせて、気持ちよお～く射精できますからねえ……んふんふ」

ラウニカ「まずは身体を震わせて……この辺り一帯に花粉を撒き散らしてしまいますね」

ラウニカ「邪魔者が入ってこれないように……うえへへ」

ラウニカ「次は媚薬効果たっぷりの蜜を……どこから出してみせますかね？ どこでもいいんですけどお……」

ラウニカ「やっぱり、この柔らかい舌からがいいですかね？」

ラウニカ「呼吸をする度に私の花粉を吸いこんで……」

ラウニカ「耳の穴からは、私の蜜を染み込ませてあげますぅ」

ラウニカ「じゃあ、いきますよお？」

ラウニカ「まずは耳たぶから……ちゅっ」

ラウニカ「ん、ちゅっ……ちゅっ……はふう。あ……ちゅっ、ちゅうう……ん」

ラウニカ「ん……ああ～……。はむ、んむんむ。はあ……む、はんむ、んむ……んふう、んふう」

ラウニカ「やわらくて、でも芯には少し固いコリコリした感触があって……楽しい、です」

ラウニカ「は……あ、んむ、んむ。んはあ、はうむ……」

ラウニカ 「花粉もたっぷり吹きかけて……」

ラウニカ 「ふうううううう～」

ラウニカ 「へ、へ、ふへへえ……えるお……えろおへん、えれおおへん」

ラウニカ 「えろえろえろ……ん、ろるろるろる……んはあ。んあ……えれえれえれ……」

ラウニカ 「わあ……人間さんの耳、赤くなってきましたよお」

ラウニカ 「それに、熱い……んふ。えろお～……ん、んちゅう……っはふう～」

ラウニカ 「はあ……はあ……ん。えろ、えろ、んむう」

ラウニカ 「人間さんの耳から私の蜜が垂れますう」

ラウニカ 「もったいないですねえ？ ちゃあんと、耳の中まで、奥まで入れないと」

ラウニカ 「耳の穴の中……いきますよ？ うえへへ」

ラウニカ 「んはあああ……じゅるつ……じゅぼ、じゅるるるる」

ラウニカ 「ん、んふう……ちゅ……ちゅ……ちゅ、はあつ、んふ……ちゅうう」

ラウニカ 「じゅぼつ、じゅぶるるる……はふう……じゅぼつ、じゅぶるるる……はつ、んつ
……はあ、はあ……ん」

ラウニカ 「じゅぶる、じゅるるる、じゅる……れろお、じゅるり……はあ……うえひひ」

ラウニカ 「私の蜜をい～っぱい流し込んで」

ラウニカ 「じゅる、ぬじゅる、んじゅうる……じゅ、じゅぶ、じゅぶ……じゅるるるるる」

ラウニカ 「吸って、また流し込んで」

ラウニカ 「ぢう、ぢうううう……ん、はつ、ふはあ……はんむ……ぢゅううううつ」

ラウニカ 「はうあ……え、えはあ……えろお、えろお……じゅぼ、じゅぼ、じゅぼ……」

ラウニカ 「はわあ……大変です。人間さんの耳の中、蜜と花粉でいっぱいですねえ」

ラウニカ 「興奮して呼吸が荒くなっていますよお？」

ラウニカ 「んふ、んふふ……私の花粉、いっぱい吸いこんじゃってますねえ」

ラウニカ 「頭がぼんやりして夢見心地ですかあ？」

ラウニカ 「いいんですよ、目をつぶって、耳を舐められる感覚だけに集中してください」

ラウニカ 「これから反対の耳も舐めますね……うえひっ」

ラウニカ 「んふ……んふ……」

ラウニカ 「ふううううう～」

ラウニカ 「敏感になってますね、人間さん」

ラウニカ 「ちゅっ……むふ。ちゅっ、ちゅっ……はふう……ん。ちゅっ……えへえへえ」

ラウニカ 「私なんかの耳舐めでもお……興奮してきたでしょお？ ……へ、へ、へ」

ラウニカ 「はあ～……ん、はんむつ……ふひひ。んむつ、あんむ……はむ……んんつ」

ラウニカ 「ふうう、ふうう……んんう……すううう……えええろおおおお」

ラウニカ 「えろお、えろお……はああああんつ。んふ、えろえろえろ。んちゅつ」

ラウニカ 「こっちの耳も、たっぷりの蜜でとろけさせてあげますう」

ラウニカ 「えろお……えろお……私の舌が、人間さんの耳の穴に入っちゃいますよお」

ラウニカ 「んはっ……じゅろおっ……じゅろおおおつ」

ラウニカ 「じゅぶ、じゅぶうう……はふ、んぬえろお……ろろろろ、あんぢゅゅゆる」

ラウニカ 「えは……んむあうふ……ふううう、ん……ぢうううう……んふ、んふ」

ラウニカ 「へあ……んぬりゅ、うう……ぢるる、じゅぼっ、じゅぼっ……つはあつ」

ラウニカ 「んはあああ……え、え、ろるるるるるうううう……ん、はあ……じゅるらあ、じゅるらあ……」

ラウニカ 「反対の耳も同時に責めてほしいですかあ？」

ラウニカ 「じゃあ……この新芽を使って、耳の中かき回してあげます」

ラウニカ 「芽吹いたばかりの柔らかい葉っぱなので、耳の中が傷ついたりはしませんからねえ」

ラウニカ 「こっちの耳は、蜜がたっぷりの私の舌で……」

ラウニカ 「じゅぼっ、じゅぼおっ……じゅるるるる。えはあ……はふ、んん……えろろろろろろおおお」

ラウニカ 「じゅるろっ、じゅるろろお……はあ、はあ……じゅるじゅる……んちゅう」

ラウニカ 「へ、へ……激しすぎですかあ？ 頭おかしくなっちゃいそ？ んふー」

ラウニカ 「んなあう、んにゅ……はんむ……ちゅろろ、あんんちゅ、ううん」

ラウニカ 「へあ、はあ……じゅぼ、ぢゅうぼっ、じゅつるるるるるううう」

ラウニカ 「んんつ、ふう……じよる、じよる、ぢううううるるるる……つはあつ、ふう、ふう、あんむ……ぬぢうるるる、じゅぼるぼるぼる」

ラウニカ 「はあ……はあ……はあ……」

ラウニカ 「うえへへ……人間さん、興奮してる……やったあ」

ラウニカ 「うれしい……うれしい……へ、へ、へひっ」

ラウニカ 「私も楽しくなってきちゃったから……」

ラウニカ 「もっと敏感なところ、舐めさせてください」

3. 蜜でぬるぬるフェラ ～媚薬の効能で特濃精液～

ラウニカ「人間さん、人間さん、私うれしいですぅ」

ラウニカ「媚薬効果のある花粉や蜜を使ったとはいえ、私なんかで興奮してくれるなんて…
…」

ラウニカ「人間さんの下半身、大変なことになってますよ？ へ、へ、うえひつ」

ラウニカ「お洋服、脱がしちゃいますねえ」

ラウニカ「ん……？ おほっ……ちっちゃい人間さんでしたが、おちんぽは元気ですね……」

ラウニカ「すん……すん……うううん、くっさあい……樹海をたくさん歩いて汗で蒸れた匂
い……栄養の詰まってそうな匂い……んふふ」

ラウニカ「人間さんの老廃物はアルラウネにとって最高の肥料ですからぁ」

ラウニカ「擦って……舐めて……吸って……たっぷり栄養をごちそうになりますぅ」

ラウニカ「じゃあ早速……このラウニカのおクチで」

ラウニカ「もちろん蜜はたっぷり出しますから、ぬるぬるですよぉ……ふひひ」

ラウニカ「先っちょに……ちゅっ。うえへつ。反応した。へ、へ……ちゅっ。うえへへつ」

ラウニカ「敏感でいいおちんぽです。ちゅっ、ちゅっ、ちゅっ」

ラウニカ「んふふ……うまくできるか分からないけど、痛かったら教えてくださいね」

ラウニカ「固くなったおちんぽの根本……あはあ、立派ですぅ……ちゅっ、ちゅっ、ちゅっ
……蜜たっぷりの舌で舐め上げて……」

ラウニカ「えろお～～、えろお～～……んふふ……この筋張った部分、気持ちいいですか？」

ラウニカ「えろえろえろ、ちゅっ。ぬえろ、ぬえろ、ぬえろ……れろれろれろお」

ラウニカ「はふう……玉の入った袋の方も……はむ、はむ、はむはむ……んふう、ほふう」

ラウニカ「えろえろ……ほんむ、えるお……んちゅ……ほふう……は、はあ……んちゅ、え
ろえろえろ」

ラウニカ「痛くないですか？ 気持ちいいですか？」

ラウニカ「へ、へ……おちんぽ脈打ってます。どく、どく、どく……って。くふふ……気持ち
いいってことでいいですね？ うえへ」

ラウニカ「えええろおお……はふ……ぬええろおお……。根本はとってもかたいのに」

ラウニカ「ちゅっ……ん、えろえろ……はふう。先端は膨れて弾力がある」

ラウニカ「ちゅ、ちゅ……れろれろお……私の蜜に濡れて艶々です」

ラウニカ「本当におっきいですね。人間さんのおちんぽ。うえへ……私のおクチに入るか
な？」

ラウニカ「えと……く、咥えてみてもいいですか？　えへ」
ラウニカ「んああ……あんむ」
ラウニカ「おほ、むふー、むふー……おんむ、んもんも……んぱはっ」
ラウニカ「えへへ……アルラウネのおクチは物を食べるため付いてるわけじゃないので、
小さいんですよ」
ラウニカ「このおクチはあ、おちんぽから精液を搾り取るためだけ……」
ラウニカ「おちんぽ気持ち良くするためだけについてるんですう」
ラウニカ「ナカはあったかくて、舌はやわらかくて」
ラウニカ「この快感を味わったら、もう他の穴では満足できなくなっちゃうかもしれません
ね。ふひひっ」

ラウニカ「はあんむ……んぬる、んぬる……ふごおい……ほふ、おふ……んもんもんも」
ラウニカ「ん……ふはっ……もっと蜜を出してぬるぬるに……」

ラウニカ「あんむ……じゅるう……じゅるう……じゅるう……んはっ、はーつ、はーつ、は
ーつ」
ラウニカ「はううむ……じゅぼつ、んじゅるるる……ぢう、ん、んふ、んふー、んふー」
ラウニカ「ぢうううううう……ん、ぱつっ……はふつ。えへへ……ちょっと苦しい、けど、
もっと……もっとする」
ラウニカ「あううむ……じゅぼるつ、じゅるんびゅ、ぐっぽ、ぐっぽ、ぐっぽ、ぐ
っぽ」
ラウニカ「んふー、んふー、んふー……おろろろるる、ぬりゅりゅりゅう……んぐっ、おふ」

ラウニカ「私の口の中、人間さんのおちんぽでいっぱいですう……」
ラウニカ「はあ、はあ、はあ……もうちょっと、奥まで、入れてみようかな……へ、へ、へ」
ラウニカ「んご……おご、ん、ご、おご……んん、んぐっ」
ラウニカ「はふ……はあ、はあ、すごいです。喉の奥まで届いて……」
ラウニカ「おあ、あんご、ほおごお……ほごおおお、ん、ん、んふー、んふー、んふー」
ラウニカ「えお、おおおおおお……ん、ぢゅるるるるうる……ん、っぱはあっ！　はあ、はあ、
はあ」
ラウニカ「はあ……はあ……ん、んん。はふう、喉の奥でえ、おちんぽの先が締め付けられ
て、気持ちいいですか？」

ラウニカ「んふふふ……もっとします？　もっとされたいですか？」
ラウニカ「へ、へ、えへ……いいですよ……んふ」
ラウニカ「あおおおん、んごっ……ご、おごおお……ん、ん。ほあ、ほあ、んぐうううう」

ラウニカ「あへあ……じゅるつ、じゅるるるるんっ……んっ、おぶっ」
ラウニカ「え？ もう出ちゃいそうですか？ ええ……もう？」
ラウニカ「わ、私としては……も、もうちょっと楽しみたいなーって。うえへ」
ラウニカ「そうだ、そしたら……私のツルでえ……袋の付け根を、ぎゅつ、ぎゅつ、ぎゅーって」

ラウニカ「こうして縛っちゃえば、もうちょっと我慢できますよね？」
ラウニカ「出したくても出せない精液がいっぱい溜まっていって……どんどん濃くなっていって……」
ラウニカ「特濃の精液ができるかなーって」
ラウニカ「おいしくて栄養満点の精液を出すためです。が、がんばってください！」

ラウニカ「では、いきますっ」
ラウニカ「んああああんむ。ぞるるるるる、じゅろろろろろっ」
ラウニカ「はあーっ、はあーっ、ん、あん……るろろろろろ、じゅぶ、じゅぶ、るろろろろろ、じゅぶ、じゅぶ」
ラウニカ「はあ、はあ、おちんぽ、真っ赤になって膨れますぅ……ん、んんんう」
ラウニカ「あんむ……おん、んんにゅ、ぬゅ、による、んぐっ……じょるじょるうう」

ラウニカ「は、はふ……うえひひ……おちんぽ暴れていますね……ん、んっ、ちゅぶ」
ラウニカ「ぢううううう……んぷはつ。ぢううううう……んぱはあつ……はあ、はふ……んんう。えろえろるろろろろろ」
ラウニカ「はんむ、んむ、んむ……じゅぼお、じゅ、じゅ、ぢゅんぼあ」

ラウニカ「さすがに限界ですかあ？ んふ……じゅぶ、じゅぶ、もう無理？」
ラウニカ「じゃあ……いいですよ？ 出しても」
ラウニカ「じゅぶっ、じゅるる、じゅぶぶっ！ 縛ってたツルもほどいてあげるので」

ラウニカ「えあ……ほら、アルラウネの口に、いーっぱい出してください」
ラウニカ「じゅぶっ、じゅぶぶっ……濃い精液……たくさん……じゅぶっ、じょるるるるる」
ラウニカ「どうぞお……んはあ、思いつきり……」
ラウニカ「もう……我慢しなくていいですからあ……じゅぼおっ、じゅぼおっ、じゅぼおっ」
ラウニカ「あおお……出う、出う、せーえひい、出ううう」
ラウニカ「口の中に……はふ、出して、出して、らしてええええええっ！」

ラウニカ「んんんんんーーっ！ んぶっつ」

ラウニカ「お、おふ……ごくっ、ごくっ、ごくっ……！」

ラウニカ「ん……ふはあ～……ああ、おいし。おいしいよお。数か月ぶりの精液さいこーで
すう……はあああああ～っ」

ラウニカ「へ、へ、へ……うひっ。ごちそうさまでしたあ」

ラウニカ「人間さんの精液、とってもおいしかったですう」

ラウニカ「……おやあ？ んふふ、あれだけ出したのに、まだ人間さんのおちんぽビンビン
ですね？ まだまだ出せそうですね？」

ラウニカ「うえひひ、うれしいですう。私なんかの身体でそんなに興奮してくれるなんて…
…もっとごちそうしてくれるんですかあ？」

ラウニカ「くふふ……精液、絞りがいがありますね」

ラウニカ「いいですよ、じゃあ次は……下のおクチに、人間さんの栄養くださあ～い」

4. 性交 ～栄養摂取大好き～

ラウニカ 「うえひひ、いよいよですねえ」

ラウニカ 「楽しみですか？ 私はとっても、とっても……うえひひひ」

ラウニカ 「あの……アルラウネが人間みたいな上半身を持っているの、なんでだと思いますう？」

ラウニカ 「本来はね、いらないんですよ？ だって花粉を受粉すれば繁殖できるんですから」

ラウニカ 「人間の体があるのは……ふひつ、人間のオスを興奮させてえ、精液をもらうためなんですよお」

ラウニカ 「だから……ちゃんとアレもありますよ？」

ラウニカ 「身体のぉ、下の方に……うえひひ……」

ラウニカ 「精液を搾り取って、セックスするためだけの穴が……ここに、ほら」

ラウニカ 「ん、んふ……指で開いたら……あ、蜜が垂れちゃいました」

ラウニカ 「この穴におちんぽ入れたら、どれだけ気持ちいいんでしょうねえ？ んふふふ……」

ラウニカ 「じゃあさっそく、こっちの穴でおちんぽいただきま～す」

ラウニカ 「ん、んんう……んん、おおお～……いいっ……おちんぽいいっ」

ラウニカ 「はっ……ん、ふ……んん、あふ……」

ラウニカ 「入っ……たあ。ん……ふ、根本までぜーんぶ……はふう、呑み込んじゃったあ」

ラウニカ 「はあ……はあ……んんっ、私も、ちゃんと気持ちいいですよお？ 人間さんと同じ感覚ではないかもですが……」

ラウニカ 「あ……んっ、精液摂取は大事なのでえ……んんっ、ちゃんと私も気持ちよくなれるようになってますう……うえひひ……」

ラウニカ 「ふ……んふう……人間さんはどうですか？ はあ、はあ……アルラウネの穴、ちゃんと気持ちいいですか？」

ラウニカ 「んひやうっ！ あふあ……んん～っ、ふー……つ。はう、うううううん」

ラウニカ 「あ、お、おくう……一番奥、そんなあ……あつはあ、いきなりい、ごつんって……はあ、ふう、それが……あああ気持ちいいんですか？」

ラウニカ 「まだ、幼い人間さんだと思ってましたが……ふへ、へあ、やっぱりオスなんですねえ……」

ラウニカ 「ん、ん、いざとなったら、ケダモノみたいに……」

ラウニカ 「私のこと……犯すつもりですね」

ラウニカ 「へ、へ、……えへえ、えへへえ……いいですよお」

ラウニカ 「アルラウネの穴……めちゃくちゃにして」

ラウニカ 「んんっ……ああ、ああっ……気持ちいい……」

ラウニカ 「人間さんのおちんぽお……ハメられて、気持ち良く、なっちゃう……」

ラウニカ 「あんっ、んん……あああうつ。はつ、あつ、ああっ……はう、ふう、ふうう、んんっ」

ラウニカ 「すごいです……こんなの……はああっ。犯されて気持ち良くなっちゃうなんて……あ、あ、淫乱アルラウネですう」

ラウニカ 「ダメ、だめえ……こんなの、こんなおつ」

ラウニカ 「ただセックスが好きなだけみたいじゃないですかあ……ううう」

ラウニカ 「お腹が空いてるだけなんですう……」

ラウニカ 「精液欲しくて、おちんぽ気持ち良くするために、私も興奮しちゃってるだけなんですう」

ラウニカ 「んんんう一つ。ふあああつ、あ、ん、ふ……うおふ……おっほあああ……んんっ」

ラウニカ 「んく、うう、う、ふ……人間に犯されてるのに、はしたない声が……出ちゃう……うう……んふ……う」

ラウニカ 「あう……ん、ごめんなさい、ああん……おっきな声、出ないように我慢しますう」

ラウニカ 「ふう、ふう……んんー……ふ、ふう……ん、あ……んん、んっ、んーつ、んんーつ」

ラウニカ 「は……ん……人間さん、ゆっくり動くの好きなんですか？ んー、んふー」

ラウニカ 「ううう、そうやって……私を焦らして、楽しんでるんですね？」

ラウニカ 「それとも……早く動いたらすぐイっちゃうの？」

ラウニカ 「は……ん……ふうん……んん、あはあ……いいですよお」

ラウニカ 「ゆっくりなのも……はあ、はあ、ふうん、激しいのも……お、ふ、私はあ、どつちも、好きなのでえ……あん」

ラウニカ 「たっくさん擦って……えう……はあ……いっぱい気持ち良くなってえ……んー、んーつ」

ラウニカ 「う……ふあ……ふあああ、ん……はつ、はあ、は、ああう……んくっ、ふあ、あ、あ、あ……」

ラウニカ 「どうせ……う、ふ、ダメって言っても、するんですもんね？ はあ、はあ」

ラウニカ 「なんだかんだ言っても……メスの穴につっこんだらやりたい放題なんだから」
ラウニカ 「でもお……はあ、はあ、許しちゃう……おちんぽには逆らえないからあ……あつ
はあああ」

ラウニカ 「無理い……気持ち良くなっちゃったら、もうだめえ……ふあああ」

ラウニカ 「浅いところ……ん、ん、おちんぽの先っぽを細かく動かして……小刻みに、はあ、
はっ。う……う、んっ、んっ……ふう、ふ」

ラウニカ 「はっ……あ、あはっ……あ、あはっ……ん、ん、んふっ……ふつ、あつ、ああ」

ラウニカ 「うっ、ふう……ほおう……今度は、深いところまでえ……あう……あうう……つ」

ラウニカ 「はあーっ、んんっ……んふー、んんっ。ほおう……んんう……はああう、ああう
ううう、はんんんっ」

ラウニカ 「はあああ……うう、は、は、はああ……んん。おちんぽ、私のナカで暴れて…
…私の弱いところ探られてますう」

ラウニカ 「でもお……はあ、はあ……全部気持ちいいい……全部気持ちいいのぉ」

ラウニカ 「人間さんがいけないんですよお……夢中で腰を振って、私のこと気持ち良くする
からあ……」

ラウニカ 「もっと、もっと欲しくなっちゃうんですう」

ラウニカ 「ツルで二人を縛って、身体と身体をぴったり密着させて……」

ラウニカ 「少し苦しいくらいがいいですよね。二人をぎゅーっと縛って、吐息も感じられる
くらいに」

ラウニカ 「ん、ふ……はあ……ふ……はあ、あはあ……ん」

ラウニカ 「へ、へへ……まるで、恋人みたいですね。ん、ふふ……こんなに強く抱きしめあ
って」

ラウニカ 「情熱的なセックスをして……はあ……ん、お互いを求めあって……」

ラウニカ 「さっき会ったばっかりなのに……うえへへ」

ラウニカ 「動きづらいですか？ 大丈夫ですう、私がツルでお手伝いしますからあ」

ラウニカ 「はーっ……はーっ……んうー、んんうー、んふー……ふう、んううう」

ラウニカ 「あ……う……気持ちいいい……ん、はあつ……ん、ふつ……はっ……ん」

ラウニカ 「すごい……はう、んん、ふうー。私の穴のナカ、すごく熱くなって……」

ラウニカ 「は、ふ、おちんぽがあ……あ、出たり入ったり……んんー、かき混ぜられてます
う」

ラウニカ 「はあ……はあ……はあ……ん、んふ……は……あつ……は……あつ」

ラウニカ 「あ……はう……人間さんの、おちんぽでえ……ん、ふ、気持ち良くなっちゃうう
……うう、う～」

ラウニカ 「ん、ふ……こんなに、きつく縛られてえ……はあ、はあう、んん、自由に動けないのに、気持ちいいなんて……」

ラウニカ 「い……う、は、栄養を搾り取るためなのに……こんな……はうつ……こんな気持ちよくされちゃって……」

ラウニカ 「は……あう……あつ、だめ。私、もうだめっ……かも。う……はあつ……」

ラウニカ 「うつ……ふううう、んつ、くううう……はあ、はあつ、うううううつ」

ラウニカ 「本当に……あ、あ、もう……無理かもっ……ですっ。気持ち良すぎて……もうっ。つふあああ」

ラウニカ 「あはあ……はあっ……ん、んんっ……あふあ、はあ、はふ……ううううんつ」

ラウニカ 「あっ、あっ……だめだめだめ……う、んんう……ふ、うう……ああああ、だめえ」

ラウニカ 「い、いやあ……イク……イカされちゃう……」

ラウニカ 「人間さんも……あ、う、そろそろ、限界ですよね？ んん、ふう……ふう……んんつ」

ラウニカ 「んんっ……んんっ……ん、ふう、ふう……んつ、んんん、くううう」

ラウニカ 「精液、ください……精液、せーえきい……あはあ……はう」

ラウニカ 「いっぱい……ちょうどい。欲しいの、あなたのせーえきい」

ラウニカ 「濃いの……出して？ 思いつきり、私のナカにい」

ラウニカ 「はっ……はっ……ん、は。はあっ……はあっ……はあっ……ん、ふあつ」

ラウニカ 「あ……くっ……ん、ふは、はあ……はあっ……ん、ん、んんんっ」

ラウニカ 「あ、あ、イキそう……はっ、はっ、はっ……んんっ、イキそう、ですっ……ああっ」

ラウニカ 「イクっ……もうイクっ……人間さんも、ね？ ね？ はあっ、出して、出してえっ」

ラウニカ 「だめっ……もうだめっ……あつ、あつあつ、あイク……んううううっ……イクイクイクっ」

ラウニカ 「んんんんんん～～～～～っ！」

ラウニカ 「ん……くっ、はあっ……ふうっ……は、は、は、んく……はあはあ」

ラウニカ 「はあ～、はあ～、はあ～……んふう、ふう、ふう……」

ラウニカ 「はあ、はあ、はあ……あ……熱い精液、いっぱい出てる……すごい」

ラウニカ 「はああ～……おいしい」

ラウニカ 「はふう……おちんぽ、最高でした。ごちそうさまです。えへ」

5. 葉っぱの上で休憩 ～ツルマッサージ～

ラウニカ「あらあ……人間さん、大丈夫ですか？ ツルの拘束を外したとたん、寝転んじやって」

ラウニカ「セックスして疲れちゃいましたか……？」

ラウニカ「あう、ご、ごめんなさい、やりすぎちゃいましたかね？ うえひひ」

ラウニカ「でも……」

ラウニカ「とっても気持ち良かったですよ」

ラウニカ「栄養もたくさんいただきちゃいましたし」

ラウニカ「ふふ、すこし休憩しましょうか～。私も隣で横になりますね」

ラウニカ「森林浴ってやつです。気持ちいいですよ？」

ラウニカ「こうやって日向ぼっこしながらのんびりするの、私大好きなんですよぉ」

ラウニカ「横になったまま、力を抜いて……」

ラウニカ「目を閉じて、耳をすませてみてください」

ラウニカ「人間さんは今、ひとけのない、静かな自然の中にいます」

ラウニカ「この近くには小川もあるんですよ？ どうです？ 水のせせらぎ、聞こえますか？」

ラウニカ「ふふふ……そうしたら……深呼吸しましょう。息を吸って～、吐いて～。リラックスリラックス～」

ラウニカ「すううう、はああああ～。すううう、はああああ～。すううう、はああああ～」

ラウニカ「ゆっくりでいいですからね。はい、もう一回」

ラウニカ「すううう、はああああ～。すううう、はああああ～。すううう、はああああ～」

ラウニカ「植物の香りにはリラックス効果もありますからねえ。はい、もう一回」

ラウニカ「すううう、はああああ～。すううう、はああああ～。すううう、はああああ～」

ラウニカ「こうして横になっているとね、ひんやりとした森の空気が、身体の火照りを冷ましてくれるんです」

ラウニカ 「しっかり休んで、またたっぷり精液出してくださいね……ひひひ」

ラウニカ 「おや、まだ体が硬くなってしまっている……かな？ それはいけません」

ラウニカ 「うえひひ……私のツルを使ってマッサージしてみましょう……」

ラウニカ 「ほうら、マッサージ、マッサージい～……」

ラウニカ 「ぎゅっ……って、押して、ぎゅっ……ぎゅっ……」

ラウニカ 「は……ふ……ほ……ん……ふ……ふ……」

ラウニカ 「痛くないですかあ？」

ラウニカ 「うまくできてるといいんですがあ」

ラウニカ 「は……ふ……ほ……ん……ふ……ふ……」

ラウニカ 「ちょっとは、ほぐれましたかね？ へへ」

ラウニカ 「最後にもう一回、深呼吸～」

ラウニカ 「すううう、はああああ～。すううう、はああああ～。すううう、はああああ～」

ラウニカ 「んんん～っ」

ラウニカ 「……んふう。うえひつ、人間さん、リラックスできてますかあ？」

ラウニカ 「こんな私でもお、お役に立てたらなによりですよお～♪」

6. 開花～花びらキレイ?～

ラウニカ 「んん～……日向ぼっこ、本当に気持ちいいですねえ」

ラウニカ 「こんなに太陽の光を浴びたの、本当に久しぶりなので……」

ラウニカ 「……ん、んむ？ お。おお～？」

ラウニカ 「おお？ これは……まさか」

ラウニカ 「えへ……やっと、花が咲く……かもお？」

ラウニカ 「んふ、んふ……あ、これは……くる……きちゃいますう」

ラウニカ 「精液たくさん搾り取ったおかげかも……うえひへ」

ラウニカ 「ふ、ふふ……んふう、私の大事なつぼみが……ゆっくり開いて……」

ラウニカ 「ふああっ、んんっ……ほおお……うつ」

ラウニカ 「見てえ、見てください」

ラウニカ 「日の当たらない場所でも、ちゃんと栄養をとってがんばれば報われるんですっ」

ラウニカ 「いいですか？ イッちゃいまいすよ？ イッちゃいますからね？ ちゃんと見ててえ」

ラウニカ 「私の、つぼみにい、割れ目があ……くばあって開いて、蜜が垂れちゃいますう～！」

ラウニカ 「ああ、イきそう、いく、お花ひらくう……あんっ……はあんっ」

ラウニカ 「……んんっ、くひいい～、んあああ～っ！」

ラウニカ 「気持ちいいい～！ あっ、あああ～……」

ラウニカ 「咲きましたあ」

ラウニカ 「はあああん。んひ……はふう」

ラウニカ 「あ、あ、すごい……私の分厚い花びらから蜜が垂れて……やあん」

ラウニカ 「私のお花、中までぜんぶ丸見えで恥ずかしい、けど……この解放感、たまらなく気持ちいいですう……はふう……」

ラウニカ 「あふあ♪ お花、咲きましたあ……うえひひっ」

ラウニカ 「私のお花、花びら、きれいですか？ たっぷり精液もらった甲斐がありましたねえ」

ラウニカ 「ああ、ちなみに、アルラウネにとっては花が生殖器なので……開花すると、性欲もマシマシになっちゃいますう」

ラウニカ 「一度そうなっちゃうと、受粉するまでは落ち着かないのでえ……」

ラウニカ「んふ、んふ、人間さん……？ 私が何を言いたいか、分かりますよねえ……うえ
へへ」

ラウニカ「たっぷりあなたで性欲処理させてもらいますねえ……ひひひ」

7. 二回戦 ～青空の下でセックス～

ラウニカ「さあ、さあさあ人間さんっ」

ラウニカ「太陽の光をいっぱい浴びながら、解放感たっぷりの中でセックスしましょうか～」

ラウニカ「ふえひつ、人間さんも、もう準備万端のようですねえっ？」

ラウニカ「そりやそうですよねえ？ この辺り一帯には、媚薬効果のある私の花粉がたっぷり舞ってるんですから」

ラウニカ「そんな場所で、さっきみたいにたくさん深呼吸なんてしてたら……そりやあ、ねえ？」

ラウニカ「えへ、へへへ……うえひつ」

ラウニカ「あのぉ……へ、へ……私い、普段はこんなですけど……本当はね……」

ラウニカ「セックス大好きなんですよぉ……」

ラウニカ「ふへ、えへ、バレちゃってました？ だってえ、精液って栄養豊富で美味しいんですもん……」

ラウニカ「花も咲きましたし、もっともっとがんばりますからあ。人間さんの精液、もっと、た～っぷり飲みたいんですう」

ラウニカ「いいですよね？ ね？ ね？ 私とセックス、ね？」

ラウニカ「一緒に気持ち良くなりましょ♪」

ラウニカ「まずは私の上のおクチで」

ラウニカ「ああ～ん、んむ」

ラウニカ「じゅぶ……じゅる、じゅるるるっ……」

ラウニカ「もう固くなってるじゃないですかあ。おクチでする必要なかったですかね？ うえひひひ」

ラウニカ「えるれうれう……んふう、はあ……ちゅるちゅるちゅる」

ラウニカ「んんっ、我慢汁も美味しいっ。んっ、んっ……じゅぼ、じゅる……」

ラウニカ「じゅろろろろ……ん、はふ、はあ、はあっ……んふお……じゅぶ……じゅぶ……じゅぶ」

ラウニカ「んふう～。んふう～。……じゅぶ……じゅぶ……じゅぶ、じゅぶ、じゅぶ」

ラウニカ「ぢるるるるる……ふはあつ。はあ、はふ……ん」

ラウニカ「おちんぽも、玉の入った袋もお……柔らかい葉っぱで包んで、さわさわ～って」

ラウニカ「新芽の柔らかい葉っぱで、すりすり、すりすり」

ラウニカ「んふ、気持ち良さそうですねえ。うれしいです。もっとしゃいますね」
ラウニカ「すり、すり……ん、はふ……すり、すり……」
ラウニカ「ぬるぬるで蜜たっぷりの舌で……れられられろ……」
ラウニカ「しゅり……しゅり……しゅり……」
ラウニカ「ぺったり張り付いた葉っぱの、葉脈のわずかな凹凸がいい摩擦になって気持ち良
くないですか？」
ラウニカ「手コキならぬ、葉コキですう……うえへへえ」

ラウニカ「しゅり、しゅり、しゅり、しゅり、しゅり……」
ラウニカ「あはあ♪ ……生まれたばかりの純潔の葉っぱが、人間さんの我慢汁を浴びて喜
んでますよお……うえひひっ」
ラウニカ「おちんぽの先端が膨れてパンパン……おいしそ」
ラウニカ「んああああ………はんむつ。じゅるろつ……ぢるう……」
ラウニカ「じゅぼつ、ぢゅゅうぼつ……えあ、ふ……じゅるろつ、じゅるろつ……はふ、ん」
ラウニカ「先っぽ舐めながら、葉っぱでも擦って……」
ラウニカ「へあ……んむ、じゅろる、んふう……じゅるるるる、おふう……」
ラウニカ「じゅろる、じゅろる、じゅろる、じゅろる、じゅろる」
ラウニカ「はあ、はあ、はあ……ん、ふう」
ラウニカ「すごいですよお、人間さんのおちんぽ」
ラウニカ「こんなにたくましいおちんぽで私の穴をかき回されたら、おかしくなっちゃうか
も」

ラウニカ「こんなの初めてですか？ 慣れてない刺激でもうイっちゃいそうですか？」
ラウニカ「まだ……だあめえ」
ラウニカ「せっかくの体験なんですから、もっと我慢してください」
ラウニカ「はあーーん……む、ろろろろる。んふ、はうむ、にゅろろろろろ」
ラウニカ「ん……ぶはあっ、もういいですかねえ？」
ラウニカ「っていうか……その、私のほうが我慢できないのでえ……私の穴に、私のナカに、
た～っぷり人間さんの精液出してください」

ラウニカ「えと……人間さんは、そこに横になっていてください」
ラウニカ「私が上に乗って、好きなように腰を振るので……うえへへ」
ラウニカ「おちんぽ、入れちゃいますね……」

ラウニカ「ん……ふううう……あ、ああ……ふあああつ」
ラウニカ「あんっ、すご、かったあ～いっ……♪」

ラウニカ「もう、私、さっきみたいに……っ。声、我慢できませんからあ」
ラウニカ「太陽の下で、ぜんぶさらけだして、気持ち良くなっちゃいますからあ」

ラウニカ「ん、はあう……ん……は……お、おあん」
ラウニカ「そっちの方が……気持ちいいもん。思いっきりい、気持ち良くなりたいんですう」
ラウニカ「突いて……ああんっ……。そう、奥まで……あ、あ、抜く時に、私のナカが擦られて……ふううううん」

ラウニカ「また……突いてっ……ひやああん。気持ちいい……それ、繰り返して……」
ラウニカ「ふああっ……ん、ふ、おううううう……ん。ああああっ……は、はふ、んううううううう」
ラウニカ「えう……人間さんのおちんぽ、気持ちいい……あんんっ！」
ラウニカ「は、は、んんんんうううう……うう、はあうっ……ん、ああああああああはあ」
ラウニカ「奥……ふああっ……ん、んん、すごっ……うああああああああ」
ラウニカ「つふ、ふうっ……んんっ……んはっ、ふう、んはああああ」
ラウニカ「えう……気持ちいいよお……んううっ……ふ、ふ、ああああああ」
ラウニカ「はううう、身体の芯から、ぞくぞくくる……」
ラウニカ「今、光合成しまくってるのでえ……んふふ、見てください。おっぱいからも蜜がぴゅっぴゅって出ちゃいますよお」

ラウニカ「ほらほら、飲んでえ。いっぱい蜜飲んでください？ その栄養で、またたっぷり精液作ってくださいねえ？」
ラウニカ「あんっ。少し揉むだけで乳首から蜜が垂れてきちゃう……」
ラウニカ「もったいないですよ、ほら……舐めてえ？」
ラウニカ「あ、ああ……ん。ちっちゃい舌で、ペロペロ……小刻みに動かして……はふう」
ラウニカ「おっぱいの蜜、おいしいですかあ？」
ラウニカ「ふうんっ……ああ、どんどん出てきちゃう。ああ、こぼれちゃいます」

ラウニカ「吸って……ね？ 乳首吸って？」
ラウニカ「んあう！ あ、あ、吸われてる。ぴんぴんに膨らんだ乳首……」
ラウニカ「唇でやさしく挟んで、ちゅうちゅう……うう、んんう」
ラウニカ「くふう……おちんぽ入れながら、おっぱい吸うのに夢中になって……」
ラウニカ「う……へう……はあ、はあ、ん……はあああん」
ラウニカ「あんっ、すごっ……んああっ、おちんぽがあ……ますます硬くなっていますう」
ラウニカ「うえへへ……動くの私にばっかりまかせてたらダメですう。人間さんのおちんぽ最高なんだから、もっと強引に突いてくれないと」

ラウニカ 「んふふ……覚悟してくださいね？」

ラウニカ 「こうですよ……こうっ！ ふあああっ！ ん、んふ、ふあああああっ」

ラウニカ 「ほらほら、私のお、精液絞りとるためだけの穴、もっと突いてえ……激しくっ」

ラウニカ 「あんっ、あんっ、あんっ！ ふは、は、もっと、もっとお……」

ラウニカ 「ふあっ……おっ、はううっ！ んあっ、ああっ、んくうっ！」

ラウニカ 「へあっ、はああっ、はああっ、はああっ、はあああっ！」

ラウニカ 「ああっ、はげしっ！ うあっ、んああっ、はっ、はっ、はあああっ！」

ラウニカ 「ん、は、人間さんも、気持ちいいですか？」

ラウニカ 「んひゅう……くうう！ おふ、ふおお、んんんんお」

ラウニカ 「はあ、はあ、アルラウネみたいな、ザコモンスター、どうとでもできるなんて思
ってました？」

ラウニカ 「う、ううっ……んあ、んお、おっく、くう……ふああっ」

ラウニカ 「やるだけやつたらあ、切るなり焼くなりしちゃえばいいって、ん、ふ、思ってま
した？」

ラウニカ 「へ、へあ……あふ、ふんっ、んんんっ……お、おお、おふ……ふうー、ふうー、
ふうーっ」

ラウニカ 「あ……あ……植物のモンスターなんて動けないし、すぐ逃げられるとでも思って
ましたかあ？」

ラウニカ 「ざあ～んねん♪ 一度根を張った植物はしぶといんですよお」

ラウニカ 「絶対に逃げられません。逃がしません」

ラウニカ 「このおちんぽと栄養は、ぜえ～んぶ私のものです♪」

ラウニカ 「えへ……人間さんだって、本当はもう拒否なんてできませんよねえ？」

ラウニカ 「あ、あん……ん、あ、あ、……あん、あんんう」

ラウニカ 「んふ、んふ、アルラウネの穴に、おちんぽ入れて気持ち良くなっちゃってますよ
ねえ？」

ラウニカ 「へ……あへあ……あ、う、ううん……は、あ、あん」

ラウニカ 「イキそうになっちゃってますよねえっ？」

ラウニカ 「えへ、へへえ……へうっ、ん、んぐっ、はあつ、はあつ、ああつ、あああつ」

ラウニカ 「じゃあ、いつちゃいましょうかあ……はふう」

ラウニカ 「ふう、ふう……あんっ、あつ、あつ、ふ……はっ、あ、あんっ、あんっ！」

ラウニカ 「ふあっ、すごっ……ぎもち、いいっ！ あつ、んくうあつ、んふつ、んふつ」

ラウニカ 「んぐっ、んぎ、ぎもち、ぎもちいいよお……はあっ、んぐっ、んんっ、ああっ、あああっ」

ラウニカ 「ああああああだめえ……だめえつ、お花がっ……受粉したくて、勝手に花粉ばら撒いちゃいますう」

ラウニカ 「勝手に、動いちゃう、花粉撒いちゃうう……止まらないっ……あああああっ」

/ラウニカ 「いやあ、繁殖したくて、発情しちゃってるのバレちゃうう」

ラウニカ 「恥ずかしいのに、止まらないっ……んっああああああ」

ラウニカ 「あああああっ……あああああ、ん、んん、んんんんっ」

ラウニカ 「は、は、はっ、はっ、はあっ、はあっ！ 人間さん、人間さんっ」

ラウニカ 「も、私っ……おかしくなっちゃってるのにっ、うあああっ」

ラウニカ 「そんな、そんなに激しくしたらあっ」

ラウニカ 「わだしつ、もつ、むりいっ！ あっ、あっ！ むりいっ」

ラウニカ 「んんっ、だめえつ、はっ、はああつ、はああつ、だめえ」

ラウニカ 「いっ……イクっ……イっちゃうっ……あっ、はっ、はっ」

ラウニカ 「ああんっ、んんっ、私っ、イきますからあっ」

ラウニカ 「人間さんもっ、新鮮な精液た～っぷり出してっ？ ああっ、ああっ、あああっ」

ラウニカ 「極上の精液でえ、た～っぷり気持ちよくさせてくださいやいっ……あんっ、んあっ！」

ラウニカ 「もう無理っ、もうっ、うああつ、うああつ、うあああつ、無理っ、無理いいい」

ラウニカ 「イクイクイクっ！」

ラウニカ 「『ああああああ～～～～～』

ラウニカ 「ん、ほおおっ……まだ、ダメっ！ やだ、やめちゃ、やだっ！ やめちゃやだあっ」

ラウニカ 「ふあつ、もっとっ！ もっとしてっ！」

ラウニカ 「めちゃくちゃにっ！ おかしくなるまでっ」

ラウニカ 「ほおうっ、んおおうっ、あああぐっ、んぎいいい、んぐうううう」

ラウニカ 「またイクっ、すぐイちゃうっ」

ラウニカ 「ダメダメダメダメっ」

ラウニカ 「んんんんんん～～～～～っ！」

ラウニカ「あああああああ、イってる、イってるっ」
ラウニカ「止まんないっ……あああっ、イクの止まんないっ」
ラウニカ「はっ、はっ……ずっと、痙攣してるっ……んっ、はっ、うっ」
ラウニカ「まだっ、まだあ……このままっ、もっと、気持ちいいの、全部、出してえっ」
ラウニカ「イキたい、イキたいのっ、あなたのちんぽで、もっとイかせてえっ」
ラウニカ「ふああああっ！ イってる、のにい……もっと大きいの、クるっ！」
ラウニカ「あああああああっ！ イクっ！ イクっ！ イっちゃううううう！」
ラウニカ「ああはああああああああああ！」

ラウニカ「あ、あ…………っつ！ かつ、はっ……くっ……ふ……ふひつ、ひつ、ふつ……
はっ、は、はふ……ん、んん……うう」
ラウニカ「う、ふ……ひう……ん、ふう……」
ラウニカ「はあ、はあ……ああ、んんあ……うえひひひ。気持ち良かったあ」

ラウニカ「はあ……って……あ、あの、その」
ラウニカ「す、すみません、開花の興奮でつい……夢中になってしまって……」
ラウニカ「ううう……恥ずかしいですう……」
ラウニカ「でも……」
ラウニカ「最高のおちんぽ……この養分、ぜ~ったいに逃がしませんよお……♪」

8. 【ルート分岐】質問 ～どんな養分になりたい?～

ラウニカ「ふひっ、人間さん、最高の養分ですねえ。精液の質はいいし、何回でもできるし……」

ラウニカ「あのー、そこで……なんですけどお……」

ラウニカ「あ、いや! やっぱりいいです」

ラウニカ「…………え? あー、うん……そうですよね、そこまで言われたら気になりますよね?」

ラウニカ「むしろ、気をつかってそっちから聞いてほしいみたいな感じになっちゃいますよね」

ラウニカ「うざいですよね……そうですよね、面倒くさいですよね……あはは」

ラウニカ「あっ、はい! 言います言います!」

ラウニカ「えっと、そのお……」

ラウニカ「あの……で、できればなんですけどお、このまま、私と暮らしませんかあ?」

ラウニカ「また日光がさえぎられちゃうと困っちゃうし……」

ラウニカ「私は動けないから、ずっと人間さんが側にいてくれれば、邪魔な枝葉を落としてもらえて助かるなあって……」

ラウニカ「あう……でもお……こんなじめじめしたアルラウネは……やっぱりイヤですかねえ」

ラウニカ「ああ、ううう……。たしかにい、日当たりのいいあっちの方には、明るいキラキラのアルラウネたちがたくさんいるみたいですけどお……」

ラウニカ「あのコたち、本当に頭の中までお花畠だし、いっぱい花を咲かせるから害虫も寄ってくるし、あと葉っぱの色濃すぎ。色素薄めの方がかわいいと思いませんか? 直射日光浴びすぎて葉やけでも起こしちゃえばいいんです」

ラウニカ「べ、べつに、うらやましくないですけどねっ」

ラウニカ「それに……それにですよ? 本当にあっちはダメなんですよ?」

ラウニカ「栄養が足りてるから、あのコたち精液とか要らないんです。人間は絞め殺してすぐ土に埋めちゃうようなヤツらなんですから……ホントですよ? あと葉っぱの色濃すぎ」

ラウニカ「…………あ、それともお……もしかしてそっちの方がお好みですかあ?」

ラウニカ「うえへへ……ほら、見てください」

ラウニカ「このでっかいウツボカズラ。人も丸ごと呑み込めちゃいますよぉ……？ うえへ
へっ」

ラウニカ「へ……へ……すごいでしょ？ んふ、これも私の一部でしてえ。人間が入ったら、
じっくり溶かして、養分にしちゃうわけなんですが……」

ラウニカ「土に埋められて腐っていくより、こっちで食べられる方が幾分かマシかなーって
……丸呑み願望とか、あったりしますぅ？」

ラウニカ「へ、へ、へ……ふふ、ふひつ、ひひひ」

ラウニカ「と、とりあえずう、人間さんを逃がしたくないのでえ……」

ラウニカ「このまま私のお世話をしながら精液を出し続けるか……」

ラウニカ「肉も骨もぜーんぶ溶かされるか……」

ラウニカ「どのみち私の養分になるのは変わらないのでえ……好きな方、選んでいただける
と……うえひつ、うえひひ」

9a. 【お世話ルート】手コキ葉コキ連続セックス ～お世話したりされたり～

ラウニカ 「もうすぐ朝日が昇りますかねえ……」

ラウニカ 「ふふっ、人間さん、疲れて寝てますね」

ラウニカ 「私のお世話をしてくれるって言ってたけど……本当に私なんかで良かったのかな……？」

ラウニカ 「本当はもっと明るくてかわいいアルラウネの方が良かったんじゃ……」

ラウニカ 「ううう……そりゃあ、私だって……」

ラウニカ 「私も日向のアルラウネみたいに派手な色の花を咲かせてキラキラに……」

ラウニカ 「ん、んんっ……」

ラウニカ 「こんにちはっ！ アルラウネのラウニカちゃんだよ！ あはっ！」

ウニカ 「…………無理い。絶対無理。私みたいに根っこが腐ったやつとは住む世界が違うんだ……」

ラウニカ 「ひえええええっ！」

ラウニカ 「いつから目が覚めてたんですか！」

ラウニカ 「あの、その、こっそり見てるなんて卑怯ですよ……私が言うのもなんですが……」

ラウニカ 「はあ……。まだ暗いのに、早起きなんですねえ」

ラウニカ 「私？ 私は、その……人間さんが枝を払ってくれたあそこから、朝日が昇ってくるのがもう楽しみで楽しみで」

ラウニカ 「私もまだ暗い内から目が覚めてしまいました」

ラウニカ 「……日の出前のこの時間が一番静かです。樹海は昼も夜も騒々しいですからねえ」

ラウニカ 「うえひひ、どうですかあ？ 私のお世話する生活には慣れましたか？」

ラウニカ 「け、結構悪くないと思いますよお？」

ラウニカ 「私の蜜や果実で、食べ物には困らないし、一応、香りとかで癒したりも……♪」

ラウニカ 「あなたは私に養分を提供するだけでいいですしい……」

ラウニカ 「あ、地面に埋めたキミの排泄物も、土に返って、ちゃーんと私の栄養になっていきますのでえ……」

ラウニカ 「ああ、日当たりにだけは気を付けてくださいねえ」

ラウニカ 「光合成をしないと、栄養不足になって……非常食に手を出さないといけなくなりますからあ」

ラウニカ 「え？ あ、ひ、ふひっ。そうです、非常食はあなたのことですう……んふ」

ラウニカ「た、食べませんよ？ 今は、ね……？ うえへへ」

ラウニカ「と、とりあえず、今日の朝ごはんの精液をいただいちゃいますねえ。よ、よろしくお願いしますう」

ラウニカ「え？ また葉っぱで擦ってほしいんですか？」

ラウニカ「しょーがないおちんぽですねえ」

ラウニカ「私が相手してあげないと、気持ち良く射精もできないんですから」

ラウニカ「んふふ……そんなにシテほしいなら、いいですよお」

ラウニカ「どうせ一、二回出したくらいじゃ勃起は収まらないでしょうし」

ラウニカ「人間さんの耳元でささやきながら、手コキと葉コキで精液搾り取っちゃいますう」

ラウニカ「ん……は……はあ……あ……あはあ」

ラウニカ「おちんぽを……ぎゅ、て握って」

ラウニカ「最初はゆっくりですよね……しゅうり……しゅうり……しゅうり……これくらいですか？」

ラウニカ「ふふ、おちんぽを柔らかい葉っぱで包むように握って、上下に動かして……」

ラウニカ「は……ん……ふ……あ……はあ……はあ……んふふ」

ラウニカ「気持ち、いいの？」

ラウニカ「あ、これ……我慢汁。もう出てきちゃいました？ んふふ」

ラウニカ「しゅうり……しゅうり……しゅうり……しゅうり……」

ラウニカ「ん？ ふふ、なんですかあ？ もう少し早く？」

ラウニカ「えと、どうしよう……しゅうり、しゅうり、しゅうり、しゅうり」

ラウニカ「これくらい？ ふふ、いい感じですか？」

ラウニカ「私の葉っぱ、気持ちいい、ですか？ しゅうり、しゅうり、しゅうり……って擦られて、気持ち良くなっちゃってます？」

ラウニカ「ああ……はあ……はあ……ん……ふ……はああ……」

ラウニカ「私も楽しいですよ？ 人間さんのおちんぽいじるの」

ラウニカ「ぴくぴく反応してかわいいです」

ラウニカ「あ、はい……もうちょっと力を入れてほしいんですね？ んふふ、我が儘さんですねえ」

ラウニカ「じゃあ……少しだけ、ぎゅ、ってして……しゅり、しゅり、しゅり……って、どう？」

ラウニカ「ん……ん……あ……はあ……あ……あ……はあ……ん」

ラウニカ「あれ、もしかして……もうイキそうになってます？」

ラウニカ「ええ……？ まだだめですよお……これからじゃないですかあ」

ラウニカ 「はい、我慢、我慢」

ラウニカ 「はあ……はあ……はあ……ん、んん……はあ……はあ……ああ、あはあ」

ラウニカ 「ふふ……私の葉っぱと、私の手で、そんなに気持ち良くなってくれるんだあ」

ラウニカ 「でもお……これじゃあ、どっちがお世話してるので分からぬえ」

ラウニカ 「人間さんは、私のお世話してくれるんじゃなかつたんですかあ？」

ラウニカ 「なのに、おちんぽ気持ちよくさせられちゃって……」

ラウニカ 「とってもかたくて……葉っぱごしにも熱くなってるの分かりますよ？」

ラウニカ 「はあ……はあ……あと何回しゅりしゅりしたらイっちゃいますかねえ」

ラウニカ 「まだダメですよお……私がいいって言うまで」

ラウニカ 「限界まで我慢してから、どぴゅ～って出しましょうねえ」

ラウニカ 「あ……ん……ん……はあ……あ……ん……ん、あ……」

ラウニカ 「もう無理ですか？ 出ちゃいそう？」

ラウニカ 「じゃあ……ん……あ……え、どうしようかな、んふ」

ラウニカ 「え？ ほんとに無理？ ん～……う……は……ああ」

ラウニカ 「葉っぱと手でしゅりしゅりされるの、そんなに気持ちいいんですか？」

ラウニカ 「ふふっ……しゅりしゅりしゅりしゅりしゅり」

ラウニカ 「じゃああ……みつ数えたら、イっていいことにしましょう」

ラウニカ 「さ～ん……ん……はあ……」

ラウニカ 「ああ、イっちゃいそ、イっちゃいそ……だめだめ。だめ」

ラウニカ 「にい～い……んふ……ふ、はあ……あ」

ラウニカ 「いい～ち……は、は、あ、あ、あ、あ」

ラウニカ 「ん～……ぜろっ」

ラウニカ 「わああ～。んふふ……いっぱい出ましたね」

ラウニカ 「気持ち良かつですか？」

ラウニカ 「でも、これで終わりじゃないですからね」

ラウニカ 「次は、このおちんぽと精液、私のナカに入れてくださいね」

ラウニカ 「今度は……人間さんが私のお世話をする番なんですから、人間さんが上になってください」

ラウニカ 「が、がんばって腰を振ってくださいね……んふ、うえへへ」

ラウニカ 「さあ、どうぞ……」

/ウニカ 「おちんぽ、入れてください」

ラウニカ 「ふうっ……んんんーーっ」

ラウニカ 「……くっ……はあっ……気持ちいい……」

ラウニカ 「あ、あ……おちんぽ入れただけで、私の穴から蜜があふれてます」

ラウニカ 「すごい……ふふっ」

ラウニカ 「……はあ、はあ、はあ……人間さん？ あの……どうしました？ 動いてください」

ラウニカ 「私のナカの感触を堪能してるんですか？」

ラウニカ 「うえへへ……そう言われると、悪い気はしないんですがあ……」

ラウニカ 「で、でも、私も……その、もっと気持ち良くなりたいのでえ……」

ラウニカ 「早く動いてもらえませんか……へ、へ、人間さんのおちんぽで、かきまわして… …」

ラウニカ 「ふうあっ……あ、ああ、そう、そうですう……」

ラウニカ 「あふんっ、ふううう……あ、あう……ひいやんっ……ふ、はううう」

ラウニカ 「あ……それ、それえ……あ気持ちいい」

ラウニカ 「う、やば……うん、あ、あ、そこ、いいです、そこ、そこお……」

ラウニカ 「そこ好きい……気持ち、いい……あはあう……気持ちいいい」

ラウニカ 「はああうつ……私の、気持ちいいところばっか突いて……」

ラウニカ 「うううん！ ん、ん、はあうつ……さすが、私のお世話係ですう」

ラウニカ 「あん、あん……んふ、ふううう、んううううつ」

ラウニカ 「……あ……っ、ん、う……すごい、すごいですっ」

ラウニカ 「ああへあ……う、うふう……ん、ふお……っくう……んんっ」

ラウニカ 「ん、んふう……おいしい精液、出すだけじゃなくって……は、ん、こんなに気持ちいいなんて……あっ」

ラウニカ 「おちんぽ好きい……おちんぽ大好きいい……」

ラウニカ 「んんふう……ふーつ、ふーつ、ふーつ……んんんっ」

ラウニカ 「私のアソコ……勝手におちんぽ締め付けちゃう……精液欲しくて、搾り取ろうとして……はっ、あっ、んんう」

ラウニカ 「ふうーつ、ううう、ううううう……んんんっ」

ラウニカ 「へ、へ……私い……太陽の光よりも、こっちの方が好きかもお……おふう……うあああ」

ラウニカ 「おちんぽがあれば、もうなんでもいいかもお……っ」

ラウニカ 「ひああああ、ん、ん……うう、ふあああああっ」

ラウニカ 「あ、あうう……シテ、もっといっぱいシテ……めちゃくちゃにしていいですからあっ」

ラウニカ 「はああああううつ……んつ、 うんつ、 うん、 うあう……はああああう」

ラウニカ 「あっ、 あっ、 あっ、 あっ、 はげし、 はげしいい」

ラウニカ 「気持ぢっ……気持ぢいいっ！」

ラウニカ 「うああああああっ……いい、 いいですっ、 もつとつ、 もつとお！」

ラウニカ 「あへあああああ、 んんん、 んふーつ、 ううううう」

ラウニカ 「いあああああ、 い、 いいいいいいっ……んくつ、 ううううう」

ラウニカ 「もっど、 づいでええ……えあああああっ」

ラウニカ 「うーつ、 ううううつ！ ふううつ、 うあああああっ」

ラウニカ 「ふつ、 あっ……もうだめ……あつ」

ラウニカ 「きちゃう……だめ、 すっごいの、 きちゃうううう」

ラウニカ 「イック……はっ、 はっ、 はっ……イック、 イックううう」

ラウニカ 「もうだめもうだめもうだめえ……えええあああだめええつ！」

ラウニカ 「だめえイクううううう」

ラウニカ 「ああああああああああああああっ」

ラウニカ 「はっ……ん、 んんう……はううう」

ラウニカ 「たまらない……たまらないんですう！」

ラウニカ 「人間さんの精液を吸い取って、 身体中に巡っていく感じ……っ」

ラウニカ 「細い葉脈の一本一本までえっ……人間さんの栄養が染み込んでいく感じっ」

ラウニカ 「あああああ……幸せですう」

ラウニカ 「ふああああああっ……ん、 んん……もう一回、 出ますか？」

ラウニカ 「あ、 あ、 うううんん……朝から、 精液のおかわりっ」

ラウニカ 「んああああああっ……は、 は、 ふつ……うううううううつ」

ラウニカ 「あああああ、 あああああ、 私もっ……すぐっ」

ラウニカ 「また、 またあ……イック、 イグう……」

ラウニカ 「気持ちいい、 気持ちいっ……」

ラウニカ 「イっちゃう……うううう、 も、 だめ……はあああああっ」

ラウニカ 「だめだめっ……ふあああああ、 あああああんっ」

ラウニカ 「ほんとに、 イキますっ……イキますよっ……」

ラウニカ 「イクっ、 イクっ、 イっちゃうううう」

ラウニカ 「ああああああああああああっ」

ラウニカ 「はあーつ、 はあーつ、 はあーつ、 はあーつ……んつ」

ラウニカ 「は、 ふう……ごちそうさまですう……今日も、 おいしいです」

ラウニカ「人間さんの精液が出る限り、おちんぽのお世話は私がしてあげますから」

ラウニカ「私の身の周りのお世話も、よろしくお願ひしますね……うえへへっ」

9b. 【丸呑みルート】ウツボカズラの中へ ～身体すべてを養分に～

ラウニカ「ああっ、そ、そうですかあ？」

ラウニカ「直接栄養に……？ 分かりましたあ」

ラウニカ「うえへへへえ……。う、うれしいですう。助かりますう！」

ラウニカ「じゃあ……うん、そうですね。早速……いただいちやいますねえ」

ラウニカ「ではでは、ウツボカズラをこちらに……よいしょ、っと」

ラウニカ「はい、この中でえ、人間さんをどろどろに溶かして、栄養にしちゃいますうう…
…」

ラウニカ「あ、このウツボカズラはですね、私と繋がっていて、私の身体の一部ですから…
…」

ラウニカ「人間さんはこれから私とひとつになるってことなんですねえ……へ、へ、へへ」

ラウニカ「あ……でも多分、このまま突っ込んだらすっごく痛いのでえ……」

ラウニカ「えっと～、まずは、蜜と花粉を流し込んで、麻酔代わりにしてあげますねえ？」

ラウニカ「そ、そしたら……私とちゅーしましょ。いってらっしゃいのちゅーです。うえへ
ひっ」

ラウニカ「は～い、甘くていい香りの私の蜜をお、た～っぷり飲んでくださいね……」

ラウニカ「ん……ちゅ、むちゅっ、あんっ……ほら、飲めば飲むほど頭がぼーっとしてきた
でしょ……？」

ラウニカ「うえひひ、目の焦点があわなくなってきたね」

ラウニカ「力が入らなくて、ぐったりしちゃってますねえ」

ラウニカ「うんうん、じゃあこのままツルで人間さんをお……袋の中に……」

ラウニカ「ではでは人間さん、いただきま～す」

ラウニカ「よい、っしょ……っと」

ラウニカ「ウツボカズラのクチを大きく開けて……」

ラウニカ「あああ～～ん……って」

ラウニカ「あれ……おかしいな、ひっかかっちゃいました？」

ラウニカ「人間さんをいただくのはひさしぶりだったので……えへ、えへ」

ラウニカ「う……ど、どうしよ。そうだ、ツルで少し押し込んでっと……」

ラウニカ「うーん、うまく入っていかないですねえ」

ラウニカ「んー、んん~? なんか引っかかっちゃってるみたいなのでえ……」

ラウニカ「ウツボカズラの内側からもっと粘液出して、滑りやすくしましょうかあ」

ラウニカ「途中で引っかかっちゃったせいで、人間さん、私のウツボカズラから顔だけ出でる……へへ、へへへ」

ラウニカ「いや、笑ってる場合じゃないですね。ど、どうしよう……」

ラウニカ「普段はこんなことしないんですけど……」

ラウニカ「ウツボカズラ自体を少し動かしてみましょうか」

ラウニカ「袋をツルでぐるぐるに巻いたら、波打つように、絞るように動かして……」

ラウニカ「ん……ん……ん……ん……」

ラウニカ「まるでヘビが獲物を丸呑みしてるみたいですね」

ラウニカ「少しずつ……下へ、下へ、落ちていきますよ」

ラウニカ「うん……うん……うん……」

ラウニカ「お、お? いけそうですね?」

ラウニカ「あとちょっと……ん、んっ……ウツボカズラに、落ちちゃえ、落ちちゃえ……」

ラウニカ「あと一息っ……」

ラウニカ「んふふ、ゆっくり味わわせてもらいますからね?」

ラウニカ「最後は一気に……は~い、どっぽん……♪」

ラウニカ「私のウツボカズラ、ぱんぱんですぅ」

ラウニカ「うえひひっ、そこも私のお腹の中みたいなものですから」

ラウニカ「人間さん? ほら、こっちですよ?」

ラウニカ「上から覗いている私が見えますか?」

ラウニカ「うえへ……ふへへ、そんな不安そうな目で見上げないでください……」

ラウニカ「私のお腹の中でゆっくり溶けていく人間さん、かわいい……なんて愛らしいんで
しょう」

ラウニカ「その溶解液も、もちろん私の体液なのですが……」

ラウニカ「まるでお風呂にでも入ってるみたいですね」

ラウニカ「その液につかってのんびりしていれば、じきに身体が溶けていきますので」

ラウニカ「麻酔の効果で動けないでしようけど、そのままゆらゆらしてれば、自然に養分に
なれますからねえ」

ラウニカ「そうですねえ……あなたくらいの人間さんがゼーんぶ溶けちゃうまで……うー
ん、5時間? 6時間くらいですかねえ」

ラウニカ「ああ……人間さんが溶けて、私の身体に染み込んでいく……」

ラウニカ「アルラウネにとって至福の時間ですぅ……」

ラウニカ「完全に溶けてなくなるまで、上からずっと眺めていてあげますからね……うえひ
ひ」

ラウニカ「人間さんのこと、ぜーんぶ余さず栄養にしていただきますのでえ……遠慮なく溶
かされちゃってください」

ラウニカ「気前よく私の養分になってくれたことはあ、私、決して忘れませんのでえ……う
えひひひひ」

ラウニカ「人間さんの養分が私の身体に行き渡って……」

ラウニカ「やがて、またキレイな花を咲かせますよ、ふふふ」

(END)